

韓国で虎子に会う

虎子は、「こし」あるいは「まる」と読む。虎の子の意味の他に、持ち運び可能な便器、つまり「おまる」の意味も持っている。

しかし、なぜ、おまるは虎の子供なのか。

6月8日から14日まで韓国へ出張した。

今年度、当館で開催する国際交流展「海山に宿る神々～日韓の祭祀遺跡～」で展示する韓国資料の借用に関わる交渉や、今後の共同研究に向けた調査のためだ。今年、考古博物館に配属された私にとって、この出張は初めての海外出張というだけではなく、人生初の海外渡航でもあった。

韓国国内での移動や案内は、当館と学術文化交流協定を締結している韓国国立羅州博物館^{ナジュ}の学芸員の方々が手配して下さり、出張は滞りなく日程を進めることができた。1週間の韓国国内での移動距離は合計すると1,000kmを超えていた。

出張の3日目に訪れた木浦市は、東シナ海に通じる内湾に面した古くからの港湾都市だ。市内の国立海洋文化財研究所(写真1)には、近海で引き上げられた有名な新安沈没船の構造材や積み荷が展示され、東アジアを結んだ交易の活況を伝えている(写真2・3)。



写真1 国立海洋文化財研究所



写真2 新安沈没船(船首方向を臨む)



写真3 新安沈没船から引き上げられた陶磁器類

また、木浦市は良質な高陵土（カオリナイト）と燃料となる森林を持ち、1,000年前の白磁から最新のセラミック素材まで長い歴史を誇る陶磁器の町でもある。その歴史は木浦市立生活陶磁博物館で知ることができる（写真4）。

ここで「虎子」に出会った（写真5）。

こちらはレプリカらしく、原品は出張4日目に訪ねた国立扶餘博物館で展示されていた。国立扶餘博物館の展示図録によると、この百済（4世紀前半～660年）の虎子は、中国南朝の影響を受けて造られた「虎形」の男性用小便器である。記録では皇帝の行幸の際、下人が虎子を持って従ったという。

おまるが「虎の子」であるのは、虎の形の容器が由来らしい。

あまりにも私が想像する虎のイメージからかけ離れており、韓国滞在中は半信半疑だった。信じることができたのは、日本に戻った後、奈良文化財研究所が2004年に刊行した『三燕文物精粹（日本語版）』の88ページに掲載された写真を見てからだ（写真6）。

中国遼寧省の北票市で発掘された北燕宰相馮素弗の墓から出土したこの青銅製の虎子は、南北朝時代（439～589年）以前の五胡十六国時代（304～439年）の類例ではあるが、確かに虎の形をしていた。

他の中国出土の虎子もリアルな虎を表現しており、大陸と朝鮮半島の間でどのような型式学的な画期が存在するのか、気になるところである。（留野 優兵）

参考文献

国立扶餘博物館編 2015『国立扶餘博物館』

奈良文化財研究所編 2004『三燕文物精粹（日本語版）』



写真4 木浦市立生活陶磁博物館



写真5 百済の虎子



写真6 北燕の虎子

出展：奈良文化財研究所編 2004
『三燕文物精粹（日本語版）』より